



大雪の湯沢を夫と訪ひゆきて
雪にあるけず難渋したりき

夫の忌日墓への道にうらじろは
葉裏をみせて風にゆれるる

心象と描写の見事な調和美。互いを引き立て、鑑賞者の胸に深い感動を届ける。大切な思い出を愛おしむように言葉を選び、美しい旋律の短歌を詠っている。☆歌集「春の庭」ほか多数

上野 下雨

花火背にお手拝借の歌舞伎船
笙の音に舞ふ手の白し夕月夜
立ち上る駱駝の吐息秋寂びて
冬の獅子座またひとすじの流星痕
鴨川の流れに据える飾餅
福笹やついと手が出る灘の酒

様々な場面で俳句が生まれ、氏の人生を占める俳句の比重を思わせる作品に羨ましさと憧れを抱く。一つのこと打ち込み、密度の濃い充実した日々を歩む生き方を見習いたい。

宇土 千鶴子

いま沈まん太陽の朱きかがやきを
満身にうく露天風呂にて
八十余年南無の日なりと喪主語る
袈裟の遺影の笑みを背にして
夏つばき山ぼうしの花つぎつぎと
しろき季節を燕はこび来
芝生の上ゆつたり歩む鴉いて
モンローウオークの尻に見惚れる

一首一首にストーリーがあり、三十一音の先の展開を想像しながら堪能できる。伸び伸びと歌を楽しみながら、自身の感性を磨き、人生に彩りを添えている氏の素晴らしい生き方を思う。

認知症の夫はひとりではしやぎをり
「良くなつたね」とみんなに言はれ

隣のベッドにうごめく夫の居るを見て
朝食を聞けばもうをらず夢か

身近な題材で、普段着の言葉による等身大の短歌を詠っている。ご主人を題材にしたものや、日常風景のなにげない一コマを丁寧な筆で詠ったものなど、自然な流れで言葉を紡いでいる。

嶋中 正子

春雨を掌に受けてみて傘ささず
青田風忍者屋敷の残る村
山若葉晴れ日雨の日暮らし坂
虫干しに年代の香や網と綿
汗の掌でやっとはづせりネックレス
秋灯下、鮎屋の湯呑の魚の文字

自身が持てる力を注ぎ込み、向上心を持って俳句に取り組む氏の情熱が窺える。意識を高め、感性を研ぎ澄ませて、その中で女性らしい柔らかな感覚を丁寧かつ自然体で織り込んでいる。

新妻 弓樹恵

木蓮の返り花見る余生かな
走り星老主は老舗たゝみける
憂き事の止めどなき世も月は澄み
玫瑰や番屋に生きる三代目
海と湖打ちち分ちて土用波
はらからの遺影新し秋桜

自身の感性や視点を大事にした自分らしい俳句を詠み、潤いに満ちた日々を過ごす氏の躍動感溢れる人生を彷彿させる。成熟した氏の内面が滲み出た作品は多くを暗示しているように思う。